

1

四十一年間生きてきて、同性にむきだしの性器を握りしめられるのは初めての経験だった。とりたてて刺激的だとは思わないが、ひどく投げやりな口調で、

「はい、オーケー」

といわれると、自尊心を少し傷つけられたような気になる。

いった本人は薄い手袋を外し、万年筆をとりあげるとカルテに何ごとかを書きこんだ。六十代のどこかだろう、と私は見当をつけた。大柄でひどく毛深い白人だが、日本語にまったく訛りはない。

ペンを握る指にも、白衣の下からのぞくポロシャ

ツの開いた胸にも、白い毛が密生している。一時間近くつづいた検診の、最後の儀式が終わった。

「もう、パンツをはいていいですか」

私が訊ねると、ドクターは老眼鏡ごしの視線を向け、にたりと笑った。レンズの奥で拡大された目は、青灰色だった。若い頃はまっ青であったものが、年齢とともに漂白されたように見えた。

「ズボンもはいて結構。うちじゃこれ以上のサービスははない」

「ほっとした」

私はいつて、体を起こした。ドクターのかたわらには、ナースの制服を着けた、いかめしい顔の女性が立っている。ドクターより少し下、五十代のどこかだろう。もしかすると二十年前からほとんど外見がかわっていないかもしれない。こちらは日本人だが、妙に「魔女」めいた雰囲気があった。

「助役、呼んで」

ドクターが魔女に命じた。彼女が動き、診察室の

外で待っていた助役を連れて戻ってきた。私はようやくベルトを留め、フラスナーに手をかけたところだった。

助役の名は木島きじまと聞いた。もらった名刺が財布のどこかに入っている筈だ。私より少し年長で、身長は十センチ近く低く、体重は二十キロ近く少ないだろう。動作は妙に緩慢だが、頭の働きはそうでもなさそうだ。

木島は私を少し見つめてから、ゆっくりドクターに目を移した。首の軋きしむ音が聞こえてきそうだった。「虫歯が二本ある他は健康。血液検査の結果をみても、この目でみても、伝染性の疾患にはいつさいかかっていない。もちろん性病もだ」

ドクターが木島に告げた。

「よかった」

木島はつぶやいた。もう一度私を見ていった。

「高州たかすさん、気を悪くされないで下さい。なにしろ小さな島ですんで、外来の病気が一番おっかないんですよ。インフルエンザだって、ほとんどが、観光

客の人がもちこむくらいですから」

「ぜんぜん気にしてません」

私はフラスナーを上げていった。

「健康診断をうけるくらいで気を悪くしていたら、盛り場の交番づとめなどできませんよ」

意味が通じなかつたようだ。誰も何の反応も示さず、木島だけが咳せきばらいをしていた。

「役場で村長が待っています。面談されたあと、着任に伴う、あれこれをしていただくこととなりますので」

私は頷うなずき、ドクターを見た。ドクターは老眼鏡を外し、いった。

「具合が悪くなったらいつでもきなさい。あと、島のことで何か知りたいときでもかまわない。私の楽しみはお喋りだね。診療料はとらんが、島酒しましゅを一本もってきてくれると嬉しい」

「わかりました、先生」

「オットー先生、ご苦労さまでした」

木島は頭を下げた。

「いや。あんたで何人目かな」

オットーはいつて、ばちばちと瞬まきした。

「六人。七人かな。保安官のなり手をみるのは。肝炎もちで落としたのが、ひとりおった」

「では、先生」

「はいよ」

オットーが手をふり、私と木島は診察室をでていった。

木造の診療所の外は、白い光が氾濫はんらんする簡易舗装の道だった。サンゴの破片を固くしきつめた、幅約四メートルほどの道路が左右にのびている。正面に濃い青の海が見えた。この道がメインストリートなのだ、くる途中、木島に教えられていた。

熱く乾いた空気を私は吸いこんだ。潮の香りはあまりない。

フェリー港からのびるアスファルト道路とメインストリートが交差した位置に診療所は建っていた。このアスファルト舗装の長さは約二十メートルで、あとはすべてサンゴ片をしきつめた簡易舗装だとい

う。

「水はけはいいのですがね、濡ぬれると滑りやすくなるのですよ。原付バイクなんかでよく転ぶ人がいる」

木島は説明しながら右に向かつて歩きました。南西諸島でもよく見かける、低く頑丈な造りの建物が道の左右につづいている。診療所のような木造家屋はむしろ珍しく、大半はコンクリートの四角い二階屋だ。

「だいたい観光客は、この通りのホテルかペンションに泊まります。食事をするとところやお土産物屋さんかも、この通りにほとんど固まっていますからね。あと、泳げるビーチもこの先くらいしかありませんから——」

左手前方にそのビーチが見えた。道路をはさんだ右手に、三階建ての、このあたりでは最も大きな建物がある。ホテル・ブルーヴィラという看板をかかげていた。手前に青國島あおくにじまダイビングセンターという名の、プレハブ造りの建物があり、「特産品コーナ

「と書かれた紙が窓全体に貼られていた。

「ホテルやペンションはたくさんあるのですか」

「ホテルが二軒、ペンションが六軒で、満室でいたい百人から百二十人といったところですかね。もう何年も満室になったのを見てませんが——」

木島は答えた。それはそうだろう。青國島は、東京から約千百キロ離れている。空港はなく、月二便運航の大型貨客船で二十八時間を要する。最も近いのは小笠原諸島の母島で、高速船で一時間三十分の距離だ。そこまでの時間と費用をかけなくとも、  
「南の島」を満喫できるリゾートは、国内外にいくらでもある。観光が青國島の重要な資源だとは、私も思わない。

「本当はいらっしゃる前に、もつと島についての情報をお知らせできればよかったです。何せ急だったのですから……。申しわけありません」

木島は感情のこもらない声でいった。

「観光シーズンはいつからですか」

私が訊ねると、木島は一瞬、詰まった。

簡単な島内案内で仕入れた私の知識だ。

四月の中旬で、よく晴れた日だった。気温は二十五度くらいだろうか。湿度はさほど高くなく、東京から着てきた冬物の上着であっても、屋内で着ているぶんには暑さを感じない。だが、日なたを歩きつづけるとなると話は別だった。青國島の村長は、女性と聞いていた。いくつかは知らないが、汗でシャツを体に貼りつかせた男に好印象をもつとは思えない。

そこで私は上着を脱ぐことにした。ネクタイはゆるめない。

メインストリートに、あまり人影はなかった。路肩には原付バイクや軽自動車のトラックが止められている。

木島が私にいった。

「ネクタイをする人はほとんどいません。高州さんの制服にもネクタイはありませんから」

「それは助かります」

「役場でも誰もしていませんし……」

「それが、あー、えーと、もう始まっています。海開きはしていますので……。といつても、だいたいは五月のゴールデンウィーク以降になります。お客さんが多いのは、ゴールデンウィークと夏休みで、本土とそれはかわりません」

ホテル・ブルーヴィラの先に、ひと回り小さな青國ビーチホテルがあり、右へ折れる道がその先にのびていた。

「この道は、鯨山の途中までのびています。ええと、ダムがあるんですわ。飲料水をためておく、小さなダムですがね」

青國島は、東西に細長い形をしていて、面積は約四十平方キロメートルある。細長い島の中央部、南北に切れこみのようなくびれがあり、北側が、今私たちが歩いている港地区だった。鯨山は島の東部の大半を占め、標高は三百メートル。西側は北側の一部が農地として開墾されている他は、ほとんど手つかずの自然が残っている。

東京を発つ前に、乗船切符とともに送られてきた

その役場は、ホテル街の外れ、メインストリートのつきあたりにあった。コンクリートでできた横長の二階屋だ。村長室は一階の向かって左奥、東西にのびる青國ビーチの東端に面する位置だ。私は、村長の井海幸子いみさちこに紹介された。

白いブラウスにグレイのスカートを着けた村長は、ふくよかな体つきで、さほど厳格ではない中学校の校長、といった雰囲気きんぎょの女性だった。だが話してみると、決して親しげではなく、千人に満たない自治体の長にしては、尊大な印象をうける。あるいは、責任感の非常に強いタイプなのかもしれないが。

「青國村は、とても豊かで特殊な自然に恵まれています。小笠原の南島と同じく、沈水カルスト地形で、石灰質の土地が隆起してできた島には、希少の動植物が多く生息しています。近年、小笠原でもこうした貴重な自然物を観光客などからどう守るかが問題になっていますが、当村でもそれを早くから重要案件としてとり組んできました」

年齢は、オットー医師の診療所にいた看護婦と同

じで、五十代後半のどこかだろう。口調はとても滑らかで、こうした「演説」を、他の場所でもくり返してきたにちがいない。

「島には、公共施設として、村役場、村立小中学校、村営青國ダムがありますが、二十五年前にアメリカ合衆国から日本に返還されて以来、自治体としては、東京都に属するものの独自の運営をおこなってきました。その中に、保安係員の設置があります」

村長のオフィスだからといって、特に豪華な内装ではない。机はスチール製だし、応接セットも布張りの安物だ。だが北側の窓から見えるビーチの景色はすばらしかった。白い砂浜に青い水平線がくつきりと浮かびあがっている。この光景を毎日眺めながら書類仕事に没頭するには、さうとう強固な意志が必要だろう。

「保安係員は、当初、村内から選んで設置していました。しかし九百四十名という、わずかしかない人口の中で、ひとりにそうした権限を与えるのは、さまざまな人間関係のあつれきを生む原因になりました

らに十年、返還が遅れたという理由があるからです」

「村民の大半は、返還後に移住された人たちなのですか」

「まぢまぢです。太平洋戦争が終結して十年ほどは、ここは完全にアメリカ海軍と沿岸警備隊の占領地でしたが、その後じよじよに規制がゆるやかになり、戦前この島にいて、戦争中避難していた方がたが戻ってきたり、返還後もそのまま住みついた、オットー先生のようなアメリカ系の方、それに移住してこられた方、などで島民が増えました。わたしはちなみに、母がこの島の出身で、三十年前に主人と母とともに、ここに戻ってきました」

村長が、青國ビーチホテルの社長であることは、木島から聞いていた。

村長はあらためて私を見た。

「高州さんの経歴は、木島さんからうかがっています。新宿警察署を皮切りに、警視庁管内のいろいろな警察署でおつとめになったそうですね」

たし、島外の観光客に対しては、経験のなさが障害になりました」

「実際に係員が必要になるようなトラブルというのは多いのですか」

私は訊ねた。

「村民のあいだではほとんどありません。トラブルの大半は観光客がおこします。貴重な石灰岩を削ったり、ウミガメの卵を掘りだしたりといった乱暴は、観光客が、宿泊施設の間やガイドの制止を聞かずにおこなうものです。以前、制止したホテルの従業員が暴力をふるわれたという事件もありました。観光は、当村の重要な資源ではありますが、そこまですすむわけには、もちろんいきません」

「当然ですな」

「ただ、警視庁に駐在所をおいてもらうには、当村はあまりに人口が少なくもあり、また離れています。小笠原には、東京都の支庁がありますが、当村にはありません。というのも、小笠原は一九六八年にアメリカから返還されましたが、当村はそれよりもさ

私は頷いた。

「大半が地域課で、最後の四年が刑事課でした」

「そこで事故にあわれたのですな」

「そうです。ひったくり犯を追っていて、車にはねられました。一度心停止したのですが、復活して、二カ月、病院にいました」

「警察はそれでおやめになった？」

「ええ。何となく恐くなりましたね。ひったくり犯は十六歳の少年で、被害者から奪ったバッグには、現金が三千八百円入っていました。それをとり返すため、というか、まあ犯人をつかまえるために、自分には死にかけた。ずっと張りこんでいたのです」

私は言葉を切って、井海村長を見つめた。

「ヒゲはそれ以来？」

だが村長は、私の警察官人生の幕をひいた事件にそれ以上関心を示すことなく、訊ねた。

「ええ」

まあ、感動の涙を流してほしかったわけではないのだから、と自分を慰め、私は頷いた。頬から鼻の

下をおおうようにヒゲはのびている。もともと童顔だったので、ヒゲのおかげでようやく「年相応」に見られるようになった。

「まずいですか、ヒゲは」

警視庁警察官なら、むろん許されない。だが青國村役場職員としてなら許されるかもしれない、と思っていた。もちろん許可が降りなければ、剃る覚悟はしている。

「いいえ」

いって初めて、村長はにこりと笑った。やさしい笑顔だった。

「とつてもお似合いになるわ」

「よかった」

私は頷いた。

村長は笑顔を消し、再び威厳のこもった表情になった。

「とにかく、当村は、やや特殊な環境にある自治体で、村民にも個性的な方が多いのは事実です。ただそれをすべて、島外からこられたばかりの高州さん

に短時間でご理解いただくのは無理でしょう。ならうよりなれよ、の精神で、誠意をもって任にあたっていただきたいと思います」

「短期間ですが、できる限りの努力はします」

私は答えた。

村長室のドアがノックされ、木島が顔をのぞかせた。

「宣誓式の準備ができました。ホールに、職員その他の方もいられています」

村長は頷き、立ちあがった。

「二十五年前まで、当村がアメリカの信託統治下にあつたことはお話ししました。そのときの習慣がいくつか残っていて、自治体職員の就任にあたって、宣誓式をおこなうのもそのひとつです」

「私が、ですか」

村長は頷いた。

「役場のホールに、二十名の職員と村民の方が集まっています」

木島がいいそえた。

「あの、宣誓するだけでよいのですか。演説とかそういうのは、駄目なのですか——」

私は急いで訊ねた。格別シャイだとは思わないが、多くの人前で喋るのは、なるべくなら避けたかった。

「大丈夫よ、それはないから」

村長は答え、私たちは部屋をでていった。

宣誓式の場合は、村役場の二階部分をすべて使った村民ホールだった。

舞台の上に木製の小さなテーブルとマイクスタンドがおかれている。テーブルの上に、文庫をひと回り大きくしたような薄緑色の表紙の本がおかれている。

村長が先にマイクに向かった。

木製のベンチが並んだ客席は、いっばいで五百人ほどがすわれそうだった。私の知らないところで告知がすんでいたらしく、その半分ほどが埋まっている。

すわっているのは、前列が職員と思し、白いシャツ姿の男女で、うしろが村民たちだった。村長が

私を紹介する間、人々の顔を眺めていた。

大半が五十代から六十代の男女で、ひどい年寄りもいなければ、子供の姿もない。

一番うしろに近いベンチにすわる女性の姿が目にとまった。浅黒い肌をして、長い髪をうしろで留めている。ジーンズにTシャツだが、化粧がなくても、派手な顔立ちが、そこだけスポットライトをあてたように目立っていた。

三十歳前後だろうか。左右にすわる人はおらず、彼女がもし独身の村民だというなら、私の仕事にはりあいがひとつ増えそうな予感があった。

「では、高州さん——」

見つけている私を彼女が見返していることに気をよくしていると、突然、村長がいった。

「は、はい——」

「こちらにきて、これに右手をのせて下さい」

まるで私の心の動きに気づいていたかのようだった。私は叱られた小学生の気分で、村長の反対側の小さなテーブルの前に立った。

「青國村村民名簿」と、薄緑色の表紙には印刷されていた。

私はその上に掌をのせた。

「復唱して」

小声で村長がいい、つづけた。

「私は日本国憲法ならびに刑法にもとづき、青國島の自然と青國村の村民の安全を守ることを、村民名簿において誓います」

復唱した。奥にすわる女性がくすりと笑うのが見えた。

「名前を——」

「高州康彦」

村長が重々しく頷いた。木島が舞台の袖から進みでた。手にしたものを村長に渡す。

「わたしはここに、高州康彦さんを、青國村保安担当官に任命します」

村長が私にそれを手渡した。手もとを見て、私はふとなつかしい気持ちになった。

腕章だった。「捜査」と書かれたそれをはめたこ

とはいく度もある。

だがその腕章には、こう記されていた。

「保安官」

まばらな拍手がおこった。奇妙な気分だ。

「ひと言、お願いします」

木島が低い声でいった。話がちがう。私は恨めしい気持ちで木島をにらんだが、例によって木島は人形のように無表情だった。

マイクに歩みよった。拍手が止み、人々が私を注視した。

「えー、高州です」

咳ばらいをしていった。後列にいたあの女性が立ちあがるのが見えた。私の「演説」には興味がないということか。ため息がでそうになるのをこらえ、つづけた。

「短い間ですが、島の皆さんのためにがんばらせていただきます。よろしくお願いします」

セレモニーはそれで終わりだった。私が頭を下げ、マイクの前を離れると、木島が、

「皆さん、ご苦労さまでした」

と告げ、会場にいた全員が立ちあがった。ぞろぞろとでていく彼らを舞台の上から見守った。

自分がひどく間抜けに思えた。何もかもが現実離れしている。「保安官」という腕章は、芝居の道具のようだ。

客席が空っぽになるまで、私は、村長と木島とともに舞台の上に残っていた。

やがて私はどちらにともなく、訊ねた。

「この腕章は、いつでも着けていなければならぬのですか」

「巡回のときだけで結構です。いずれ着けていなくとも、村の人は、高州さんの顔を覚えるでしょうし」

村長が答えた。

「そうでしょうね。観光客にわからせるためだければ意味がない」

私は息を吐き、いった。

「でもバッヂじゃなくてよかった。ほら、西部劇と

かを着けているでしょう、保安官が。あれじゃ、いかにも間抜けだ」

二人はつかのま黙った。木島がいった。

「以前は、バッヂでした。アメリカ海軍の委託をうけた村民が着けていました」

言葉に詰まった。いわなくてよいことをいい、人の反感を買う癖は、いくつになっても直らない。別れた妻にもよくそれを指摘された。特に上司や議員といった「お偉いさん」を相手にすると、その癖はひどくなる傾向があった。

「助役が宿舎にご案内します。今日はお疲れでしょうから、ゆっくり休んで下さい。明日、役場にきていただいて、職員ひとりひとりをご紹介します」

村長が冷やかな声で告げた。私はうなだれ、頷いた。

「宿舎というのは、青國ビーチホテルの一室だった。一階の、フロントに近い部屋だが、バス・トイレはついている。」

「高州さんの場合、半年という短期間ですので、村長が無償で部屋の提供を申しでられました。おひとりでは、ホテルの方が何かと便利でしょうから」

「木島がいった。ベッドのひとつを外したツインルームで、かわりに整理ダンスがおかれている。スティーレル製の本棚もあった。」

「食事はホテルの食堂でおとりになれますが、通常朝食のみで、夕食については予約が必要です」

「木島のかたわらに立った男がいった。二十七、八

「木島は頷いた。」

「脳梗塞のうこうそくでした。特に血圧が高いとか、そういうことではなかったようです。具合が悪いので、一、二日、巡回を休みたいと役場に連絡があって、三日めに私がお宅にうかがったところ、亡くなられていました」

「脳梗塞の診断はどなたが？」

「オットー先生です。特に近いお身寄りがいらっしやらなかつたので、村の共同墓地に埋葬させていただきました。柴田さんとおっしゃって、温厚な、よい方でした。四年前に警察を退職されたとうかがいました」

「知っています。東村山署を警部で退官されたのでしたね」

「私が告げると、木島は当惑したように瞬きをした。「お知り合いましたか」

「いいえ。少し調べさせていただいたんです。警官というのは、いろいろつながりがありますから」

「柴田は、五十八歳で退官後、一年で妻を亡くして

「だろう。よく陽に焼けていて、ひきしまった体つきをしている。従業員の栗橋りしかしと名乗った。」

「食費はどうすればよいのです？」

「朝食は一食五百円、夕食についてはメニューに応じて、給料からひかせていただきます。もし自炊を希望されるなら、前任者の使っていた家を貸与いたします」

「木島の説明に私は頷いた。前任者は二年半、つとめたと聞いていた。」

「もしこの島が気に入って、ずっと住みたいと思つたら、契約を延長してもらえますか」

「栗橋が笑みを浮かべた。快活で好もしい若者だ。」

「村長のご判断です」

「木島が答えた。前任者の契約年数は三年だった。つまり、足りない六カ月間を、私が補う。」

「高州さんはあくまでも、観光シーズン中の臨時保安官ということになります。正規保安官になられるには、村議会の了承も必要です」

「前任者は、ええと、亡くなられたのでしたね」

「いる。子供はおらず、その後退職警察官向けの通信誌に掲載された、青國村の求人広告に応じて、契約した。死亡したのは三週間ほど前だ。」

「調べるのが商売だった者に、そうした事情を調べるなどというほうが無理ですよ」

「私が笑ってみせると、ぎこちなく頷いた。」

「そうですね。そうでしょうね……。また、私は、怪しまれたのかと思って——」

「医師が不在の状態で自宅で亡くなったわけですから、変死といえば変死です。したがって検死が必要になります。死体を見て、死因に事件性があるかどうかを、医師が判断するわけです。この医師を監察医というのですが、この場合、お医者さんはオットー先生しかいらっしやらないのだから、オットー先生が病死だと判断されたのであれば、問題はありませんよ」

「よかった。実は少し、心配しておったんです。保安官が亡くなるというのは、村外の方に委託を始めて、初めてだったのですから」

木島はほっとしたようにいった。

「後任の方に、もし何かいわれたらどうしようかと。そうした法的な手続きのことは、私どもはまるでわからなかったもので……。本来なら、それこそ保安官の仕事だったわけですから……」

「わかりますよ。本職の警官を呼ぶといつてもたいへんでしようしね」

木島の緊張ぶりが気の毒でもあり、私は頷きながらいつてやった。

「そうなんです。何しろ東京からの定期便は、二週間に一度という少なさです。小笠原の警察署に頼んでも、お巡りさんがくるのに、船だけで一時間半かかるといった具合ですから——」

本来なら警官を呼ぶべきだったろう。だが特に事件性に思いあたる節がないのなら、小笠原署の警官も、電話による医師の報告ですませたいと思つたにちがいない。

我も人、彼も人、だ。

「——では、今日はゆつくりお休み下さい。ホテル

私はいつて頭を下げた。

「それと、さっきのバツヂの件は申しわけありませんでした」

離婚するとき、失言は早いうちにあやまっておきなさい、と元妻に教わつた。元妻は、あらゆる点で私より優秀で、なぜ私と結婚する気になつたのか、長いこと理解できなかつた。それだけに離婚するとき、悩まずにすんだ。もつともそう口にして、そのときも彼女に叱られたが。

「は？」

一瞬、とぼけてみせたのは、意外に木島が好人物だからなのかもしれない。

「いえ。何でもありません」

「それじゃ、失礼します」

木島と栗橋がでていき、私はホテルの部屋にひとり残された。スーツケースがふたつ、ベッドのかたわらに立っていて、それが私の荷物のすべてだ。

ベッドに腰をおろし、部屋の中を見回した。

都内に借りているアパートは解約をしていないも

のことで何かあれば栗橋くんが説明してくれますし、私は五時までなら役場にいます。電話代は村の負担ですので、部屋からかけて下さって結構です。それから携帯電話は、村内の一部地域では使えません。船舶電話用のアンテナしか、まだ立っていないものですから」

私は頷いた。

「特にかける相手もいません」

「島の地図と、古いものですが役場の記録等が、その本棚に入っています。時間のあるときに目を通しておいて下さい」

先ほど私が宣誓をした、「村民名簿」もそこにあつた。

「わかりました」

「何もなければ、明日九時、役場の方でお待ちしています。公用車の鍵もそのとき、お渡しいたします」

「いろいろお世話になります。よろしくお願ひします」

の、電話、電気、ガス、水道はすべて止めていた。郵便物も局留めになつている。

これからの半年間を、私はここで生活することになるのだ。

特にすべき行動は思い浮かばなかつた。私の仕事は、公設ガードマンで、村の治安を守るといっても、それは島外からやってくる観光客を対象にしていると考えてよいようだ。

思いつき、村民名簿を手にとつた。表紙をめくる。一昨年十一月の日付が入っている。その時点でこの島に居住していた者、ということらしい。

名簿は地区別ではなく、五十音順で作られていた。姓名につづき、住所と電話番号が入っている。同一姓、同一住所は一族と判断できる。

同じ姓がいくつか目立った。地方の集落では珍しいことではない。

浦見、草引、船月といった姓がそれだった。どちらかといえば本土では珍しい姓が、こちらではあたり前の姓である。



井海姓は三家族、木島姓は二家族しかない。試しに前任者の柴田の名を捜した。

なかった。柴田姓の人間は記載されていない。

保安官は村民とは見なされていないのだろうか。

もしそうであるなら、あまり愉快な話ではなかった。

雇われた人間は、たとえ島内に住んでいても、民

とは認めない、ということなのか。

私は井海幸子の尊大な口調を思いだした。

「保安官にも村民としての人權を」

そう請求したら、彼女は何と答えるだろうか。ただちにクビになり、腕章をとりあげられて、東京に帰る羽目になるとか。

やめておこう。クビになるのが恐いのではなく、大人げないと思われるのが嫌だからだ。確かに私は青根村役場に雇われたガードマンだが、宣誓式に現われた村民の反応を見ている限りでは、見下されていたという印象はない。

名簿を閉じ、本棚に戻した。ホールで見かけた

“美女”の名を知りたいと思ったが、九百四十人の

いた。ここではたぶんそうはいかない。だが保安官の給料はさして悪くない。諸手当こみで、所轄署の課長なみといったところだ。

しかも家賃がかからないとなれば、六カ月で通帳の残高を大幅に増やす望みももてそうだ。村民名簿に記載されていないどの屈辱で棒にふるのは惜しい仕事といえた。

部屋をでて廊下を歩き、フロントの前にでた。栗橋が微笑んでいる。

「おでかけですか」

「ちよつと散歩してこようかと思う」

私は部屋の鍵をかざした。

「これはどうしよう？ 預けておくべきかな」

「保安官がおもちになつてけつこうです。お部屋には、他のお客さまとちがつて、清掃のお申しでない限り、入りませんから」

保安官と面と向かっていわれ、何ともいえない気分になった。芝居の役柄名を呼ばれているようだ。

源氏名を初めて呼ばれる水商売の人間も皆、こん

約半数にあたる女性名から特定するのは不可能だ。ここには生年月日は記されていない。

村役場なら、住民基本台帳があり、それで生年月日を知ることができるだろう。だが職権の濫用にあたる。

何を考えているのだ。私は首をふつた。あの美女が独身だという保証はない。もし結婚していて、それにもかかわらず保安官が交際を迫るようなことにならなければ、二人目の保安官が必要になる。

時計を見た。午後三時を回ったところだ。少し腹が減っていた。

着替えて表にでかける決心をした。スーツを脱ぎ、部屋の扉に近いクローゼットの中に吊るした。スーツケースからジーンズと長袖のシャツをだした。荷物の整理は、やることのない夜の暇潰しにとつておく。

靴をスニーカーにはきかえ、革靴もクローゼットにしまった。警察官であつたときは、制服は当然として、私服刑事のスーツや靴も官費の補助をうけて

な気分を味わうのだろうか。

何回か飲みに行った、新宿のそうした店の女の子たちを思い浮かべた。

警官にしては、私はもてた方だつたと思う。管轄区域の店で飲む警官がもてることはまずない。理由は簡単で、払いが悪いからだ。相手を警官とわかつていて吹っかける店はない。吹っかけるのがあたり前のそういう店にしてみれば、警官は席やホステスを無駄に使う嫌な相手だ。

やくざ者より払いが悪く、怒らせればやくざ以上にタチの悪い警官も実際にいる。やくざなら、嫌がらせをうければ警察に被害届けをだせばよい。だが警官に嫌がらせをされたら、苦情をもっていく場はない。署の上の方にかけば、と考えるのは素人だ。確かにそうすれば、店にはこなくなる。だがかわりに、未成年者を雇っていないかだの、客の違法駐車が多いのだのと、さらに嫌がらせをうける結果になるのだ。

私は正規の料金で飲み、嫌がられていると感じた

店には、二度と足を運ばなかった。倫理観というよりは、プライドの問題だった。嫌われてまで遊びたいとは思わない。

「このあたりで軽く腹ごしらえをしたら、どこがいいかな」

栗橋青年に訊ねた。

「そうですね……。港に『ブルーヘブン』という喫茶店があるんですが、そこなら、サンドイッチとかパスタ類がおいにあります。あと、食堂とかになると……」

背後の壁にかかっている時計をふり仰いだ。

「五時にならないと開かないと思います」

「じゃ、そこへいってみよう」

私は頷いた。

青國ビーチホテルをでると白い光の中に立った。サンガラスがスツケースのどこかに入っていた筈だ。サンゴの破片をしきつめたという道のせいで、光が乱反射しているような気がする。

道路にはあいかかわらず人影がなかった。今朝、私

には、他のビーチも載っていた。

歩くうちに道路がアスファルト舗装にかわった。

フェリー港の施設に入って左手に、発券所と待合室のある二階建てがあり、隣接する形で、ブルーヘブンのあった。平屋の垢抜けた造りをしており、港の内側に向かってオーブンテラスになっている。木でできたテーブルと椅子が四組ほどおかれていた。

そのひとつにすわった。紫外線をさけるためか、店のガラス戸は暗く、中のようすはわからない。だが営業していることは、その戸のひとつが開き、Tシャツにエプロンを着けた少女が現われたことわかった。

「いらっしやいませ」

十八、九に見えた。よく陽焼けし、健康的にふくらんだ頬と、くりくりとした目が印象的だ。

「こんにちは。何か食べるものはできるかな」

私の問いに少女は頷いた。

「シーフードスパゲティとサンドイッチ、ミックスピザ、それにピラフになります」

を港まで運んできた貨客船には、十四、五人の観光客が乗りこんでいた。彼らは私が健康診断をうけている間に、宿泊施設にチェックインし、今頃はビーチにでもでているのだろう。

島は東側を流れる海流のせいで、年間を通して海水温が高く、海水浴は八カ月以上可能だと、確かパンフレットには書かれていた。

港の入口へと通じる道の右手にビーチが見えた。急深を思わせる、傾斜のついた砂浜が海に向かって落ちこんでいる。だが打ち寄せている波があまり荒くないのは、沖合いに点在するサンゴ礁のせいだろう。海水の色は、一部が青く、一部が明るい緑色をしている。

ビーチの手前の、平坦な部分にパラソルがいくつか立っていた。水着をつけた人影もある。

砂浜の長さは、およそ三百メートルといったところだ。たぶんこうした小さなビーチが、島の他の場所にもある筈だ。木島は、泳げるビーチはここしかない、といっていたが、パンフレットにあった地図

「アイスコーヒーとシーフードスパゲティを」

「承知しました」

いったん店内に戻り、氷水の入ったグラスとプラスチック製の灰皿を届けにきた。

本日はビールを飲みたかったのだが、来島早々、まだ着任前とはいえ、保安官が昼から外でビールを飲んでいて、と村民の噂になるのは避けるべきだろう。

さほど期待はしていなかったが、スパゲティの味は悪くなかった。食材は冷凍ものだとしても、調理には気を使っているようだ。コーヒーも明らかにドロップした香りがある。

食事を終え、煙草に火をつけたとき、ガラス戸が開いた。

あの女性がビールのグラスを手に、立っていた。宣誓式で見かけた美女だ。ガラスによりかかり、いった。

「こんにちは、保安官」

顔立ちに似合わない、ハスキーな声だ。

「こんにちは。宣誓式にいらしてましたね」

彼女はくすりと笑った。グラスの中身は四分の一ほど減っていたが、酔っているようには見えない。

「さすがね。きていた人の顔を覚えてるなんて」

あなただけです、と答えるのはいくらなんでもキザだろう。私は黙って首をふることにした。

「少しお話しさせていただけいいい？」

「どうぞ」

答えると、彼女は微笑んだ。まっ白な歯をしている。アジア系の外国人を思わせた。情熱的な島の女。空想と期待だが。

私の向かいに腰かけ、ジーンズのヒップポケットからメンソール煙草の箱をひっぱり出した。

「高州です」

私が名乗ると、こくと頭を動かした。

「聞いてた」

「あなたは？」

彼女はわずかに顎をあげた。

「チナミ」

火をさしだした。

「サンキュ。この島、どう？」

火をつけるとき、Tシャツを大きく盛りあげる胸に目が釘づけになった。女性の体の部分で、特に胸が気になるたちではないが、細いウエストに比べ、あまりに立派な大きさをもっている。

「まだ、今朝着いたばかりなんで」

「村長は？ 会ったでしょ」

返答に窮した。チナミはにやりと笑った。その笑顔には、「共犯者になろうよ」という誘いかけがあった。

「けっこう恐そうじゃなかった？」

「まあ……そう感じなくもない」

「同じだ」

チナミは笑みを大きくして、煙を吐いた。

「ひとりできたんでしょ」

ビールを飲み、訊ねた。

「そうです」

「保安官は独身だものね」

「チナミ、さん？」

頷いた。

「千の波と書くのですか」

「カタカナ。カタカナのチナミ」

「じゃ、名前だ」

「そう。東京からきたの？ 保安官は」

「ええ」

「東京のどこ？」

「世田谷です」

アパートの所在地をいった。

「ふーん」

チナミはいった。

「この島の方ですか」

「そうだよ。もうじき四年になる」

「じゃあ、島外から？」

「保安官といっしょ」

頷き、チナミは煙草をくわえた。そして待っていた。少し間があき、気がついた。私は自分のジッポの

独身が条件だとは聞いていなかった。

「前任者をご存じでした？」

チナミはゆつくりと首をふった。

「あんまり」

「そうですか」

「でもマジメに仕事してたよ」

「たとえば？」

「たとえばって？」

「どんな仕事か」

「うーん」

チナミは唇を尖らせた。ぼつりとした厚みのあがる唇をしている。

「巡回とか、ケンカの仲裁とか」

「ケンカ」

「南地区。あつちは漁師で血の気が多いのがいっぱいいるから」

「南地区というのは、ここは島の反対側でした  
ね」

チナミは頷いた。

「南側ね。漁港があるよ。昔は鯨もとっていたって」

「人はたくさん住んでいるんですか？」  
チナミは首を傾げた。

「二、三百人、くらい。あと、中地区なかもあるし」

「中地区」

「島の西側。果樹園のあるところ」

「港地区、南地区、中地区」

私は数えた。

「他には？」

「人が多いのは、それくらい。一番多いのがここ。

ねえ、鯨山、登って見た？」

私は首をふった。

「いえ。きたばかりですから」

「明日、登ってごらんよ」

「時間があつたら。景色がいいのですか」

チナミは再びにやりと笑った。今度は「邪悪な隠しごと」といった笑いだ。

「いってごらん」

り方は子供じみているが、チナミは私を推しはかっているように見えた。

「そう」

チナミはけだるげに頷き、煙を吐いた。

「アオウミガメ。ゴールデンウィーク頃から夏休みいっぱいくらいの時期、海からあがってくるの」

「たくさん見られるのですか」

「小潮のときは多いよ。何千頭つてあがってくるもの」

「そいつは見てみたいな」

私はつぶやいた。話を合わせるためではなかった。

「泣くんだよね。砂掘って、ぼとりつて卵産むときに。産みの苦しみであるじゃない。あれなのか」

「ちようどよいきっかけになった。」

「チナミさんは結婚されているのですか」

首をふり、にっこりと笑った。

「結婚してたら、この島にはこないよ」

私は首を傾げた。

「ダムがあるとは聞きました」

木島の話の思いだし、いった。チナミは首をふった。

「それって北側の方でしょ」

「他にも道が？」

「南地区に抜ける道の途中にも、登れるところがあるよ」

地図を思い描いた。南北のくびれをつなぐ道のことだ。東西に細長い島の、北側のくびれが、今私のいる港地区、南側のくびれが南地区だ。

「ビーチは？」

「あそこ」

私の背後を鼻でさした。

「他のビーチは？」

「カメハマ」

「カメハマ？」

「うん」

「亀がいる浜ですか」

ひどく間が抜けている、と思いながら訊ねた。喋

「そのうちわかるって」

チナミは笑みを消さずにいった。

会話が途切れた。チナミが立ちあがるそぶりを見せた。

「あの——」

ひきとめるためにいった。

「なあに」

「教えてほしいのですが」

中腰になりかけたチナミを椅子に戻すことに成功した。

「この島の人にとって、保安官はどんな存在なのでしょうね」

我ながら馬鹿ばかげていると思いがらいった。会話をつなぎとめるためとはいえ、アホなおっさんだと思われたなら逆効果だ。

だがチナミは真剣に考えるそぶりを見せた。好感度アップ。私から見ての話だが。

「うーん、便利な人」

「便利？」

「この島って、多分ちよつとかわつていると思うの。ずつと人が住んできた歴史があるわけじゃないのに、身内意識が強いつていうか、よそ者に冷たいところがある」

「なるほど」

たとえば村民名簿に保安官を載せないこととか。

「身内だけでいても、トラブルはやつぱり起きる。

原因が外からくることもあるし、内にある場合もあるけれど。どっちにしても、トラブルが起きたとき、

解決はよその人間に任せたほうが、あとあと尾をひ

かないつて考え方があるみたい。解決の方法がまち

がっついていても、あれはよそ者なのだからと納得する

しかないみたいな」

語尾をあげた。

「つまり保安官はあくまでもよそ者であるべきなの

ですね」

「そうね」

あっさり頷いた。

「この島に何年住んでも、よそ者はやつぱりよそ者

なんだよね。別に差別されるとかいじめられるつてわけじゃないけれど」

「地縁血縁の世界なのかな」

「さあ」

チナミは首をふった。

「何かあるのじゃない。でもそれが何かつてのは、

よそ者には永遠にわからない。よそ者がこの島に迎

え入れられるのは、その役割があるときだけ。あた

しもそうだし、保安官もそう」

その言葉の意味を考えた。

「役割はよそ者でなければ果せない？」

「そうよ」

チナミを見つめた。この出会いが偶然ではないこ

とに気づいた。チナミは、私を待ち伏せていたのだ。

「あなたの役割は何なのです？ この島での」

「今は内緒。すぐにわかるだろうけど」

答えて、チナミは腰をあげた。どうやら目的は遂

げたようだ。彼女の目的は。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。